

タ リ タ ・ ク ム

“Talitha, koum”

「少女よ、私はあなたに言う。起きなさい」 (マルコ 5: 41)
日本聖公会 正義と平和委員会・ジェンダープロジェクト

第 43 号

2023 年 2 月 25 日

〒162-0805

東京都新宿区矢来町 65

日本聖公会管区事務所気付

正義と平和委員会

・ジェンダープロジェクト

TEL 03-5228-3171

発行責任者:金善姫(キムソンヒ)

ジェンダープロジェクトの今とこれから

司祭 フィデス 金善姫 (中部教区)



わたしは2008年より15年間、ジェンダープロジェクトのメンバーとして関わってから、多くの方々と出会い多くのことを学ばせていただきました。今は正義と平和委員会の担当も務めていますが、今年の4月より大韓聖公会ソウル教区へ出向し日本をしばらく離れることになりました。ジェンダープロジェクトの活動を振り返り、今とこれからの課題を共有できればと思います。

教会の中で、性役割の固定化があることの気づきから、ジェンダー規定による疎外や差別を経験する人がいる現状を見つめ、「女性」として経験をし、語り合い、祈り合い、分かち合うことを大切にしてきました。その活動の中では「女性」という主体を単なる男女二分法の性別としてとらえず、周縁化されている人々として理解し、すべての人が尊重されて「その人らしく」生きることができるよう教会・社会の中で活動してきました。

2002年11月に発足した日本聖公会正義と平和委員会・ジェンダー委員会は、第53定期総会后、「正義と平和委員会・ジェンダープロジェクト」として活動を再開し、「プレ・聖公会女性会議(2003年8月20日～22日、「今、女性の視点から21世紀の福音宣教を！」)」を通して私たちのまわりにある様々なジェンダーに関わる課題を整理し、参加者が気づき、祈り、語り合い、励まし合う機会となりました。気づいた課題は、ドメスティック・バイオレンス、セクシュアル・ハラスメント、職場での性差別、児童虐待、児童売買春、従軍慰安婦問題、経済問題と女性への暴力(貧困、売買春、HIV/AIDS)、性的少数者への差別、広く女性に関わる人権の諸問題、生命に関わる諸問題、正義と平和に関わる諸問題など長い歴史の中で幅広く存在しているものでした。

ジェンダー課題への気づき、啓発のための機会づくりのために、2005年3月3日に第1号の『タリタ・クム』を発行しました。国連女性の地位委員会と聖公会女性会議へ参加し、2006年の総会では女性デスクも誕生し協働しています。

2006年8月16日～19日は第1回の女性会議が「今、私たちは新しい扉を開く」というテーマで、ゲストとしてアリス・メドコフ司祭(カナダ聖公会)、チョン・ヨンジンさん、

キム・テキさん(大韓聖公会オモニ会)を迎えて、呼びかけ文を採決しました。その呼びかけ文は今、教会の中でどれほど広く深く根付いているのかも気になるところです。女性会議以降、女性の司祭職の有効性の保持と尊重を重要な課題の一つと位置づけました。女性デスクの総会への議案提出によって 2014 年には「女性の聖職に関わる諸問題についての調整と検証・提言作成のための特別委員会」が設置され、「女性司祭の実現に伴うガイドライン(1998年5月第51(定期)総会決議第28号)」が2018年6月日本聖公会第64(定期)総会で「日本聖公会における女性の司祭按手に関するガイドライン」に改定されました。同時に「女性の聖職位に関わる委員会」が設置され、「女性の聖職に関する相談窓口」が開設されました。その20年の歩みの中で2022年、日本聖公会において主教に按手された笹森田鶴主教の存在は大きな励みになります。

また、2006年3月に京都教区での事件を受けて「教会とセクシュアル・ハラスメント～他教派の経験に学ぶ～」学習会を開き、セクシュアル・ハラスメント防止に対する取り組みを始めました。2006年の総会決議により、女性デスクがハラスメント防止のモデル案を策定しましたが、ジェンダープロジェクトは女性デスクと協働して研修会を行い、各教区のハラスメント防止の活動に関わり、管区のハラスメント防止担当者ができるまで様々な役割を担ってきました。

さらに「女性」が男女二分法を乗り越えるための一つとして性的少数者への理解を深めるため、中部教区の性的少数者プロジェクトの担当である後藤香織司祭の「わたしの瞳にうつる風景」を『タリタ・クム』へコラムとして連載し、学習会を開催するなど性的少数者の当事者の声を聴くことを大切にしています。2022年は「虹色のはこぶね(ジェンダーとセクシュアリティについて考える北海道教区有志グループ)」主催の「さっぽろレインボープライド2022」関連企画講演会「奪い取れ！～性的マイノリティの尊厳と宣教の課題～」に協賛しました。これからも各地のレインボープライドの働きにも積極的に関わられることを願っています。

そして、2012年に開催された日本聖公会宣教協議会においては、「意思決定機関に2022年までに少なくとも30%の女性の参画を実現する」ことが提言に入りました。ジェンダープロジェクトはその提言を受け、女性の司祭職の課題、意思決定機関への女性の参画をテーマとして2013年に第2回日本聖公会女性会議を計画、実行しました。

有志で行われていた草の根レベルの活動は「女性が教会を考える会」、女性フォーラム、女性団体連絡協議会、黙想会、講演会、井戸端会議など様々な形で今も根強く行われています。国際的なネットワークとの連携・協働も大切にしつつ、国連女性の地位委員会(CSW)と国際婦人年連絡会(政策方針参画委員会、労働委員会、家族・福祉委員会、教育・マスメディア委員会、環境委員会、平和委員会、憲法委員会、国際・開発委員会)にもつながっています。

これからも一人ひとりが尊重されるように、私たちはもっと世代を超え、地域を超え、制限をも超えながら新たなチャレンジを続けていきたいと願います。

「切なさ」と「暖かさ」

執事 エリサベト 三浦千晴 (北海道教区)



三浦新執事と笹森主教

私は、2022年11月23日、マリア・グレイス笹森田鶴主教より按手され、執事に聖別されました。あれから2ヶ月。執事按手式は、遠い昔の出来事のように今、感じています。

按手前の8月・9月は、執事試験期間でした。聖職候補生として牧師館に住まわせていただき、教会の職務にあずかりながらの試験でした。信徒の皆さま、また管理牧師の笹森主教をはじめ、諸先輩教役者の皆さまに助けをいただきながらも、緊張して時を過ごしていました。

そんな日々のある夜のこと。日が暮れると寒さが増していった頃のことです。夕食を終え、試験レポートに取り組み始めたその時、「ガチャ、ガチャ」と牧師館のドアノブを開けようとする音に驚きました。「誰だろう。チャイムも鳴らさず、ドアを開けようとする人は」正直、一瞬息をのみました。しばらくして静かになった時、そっと外を覗いてみると、そこにいたのは、信徒のKさんでした。Kさんは、教会近くの高齢者施設に入居されている方です。「Kさん、どうしたの？」そのように声をかけると、私の顔をご存じのほずのKさんなのですが、ご自身もびっくりされたご様子。言葉を発しておられるのですが、何を言っているのか理解できませんでした。「Kさん、一緒にお家に帰ろう」そう言って、もうすっかり暗くなった夜道を二人で歩き始めました。

「Kさん、一人で夜外出したら、危ないですよ」こちらの語りかけに何か答えようとするKさんの言葉を、私はどうしても聞き取ることができません。そのうちだんだんKさんの顔も険しくなっていました。「このままだと、よくないな」と思ったその時、とっさに聖歌498番が口をついて出てきました。「主われを愛す 主は強ければ」と口ずさむと、何とKさんもはっきりと歌い始められたのです。そして私の腰に手を回し、とても楽しげに歌い続けられました。私もKさんの腰に手を回し、お互いに歌いつつ、暖めあいながら、無事お住いの施設へお送りすることができました。

「Kさんは、もう何もわからなくなっている」私はそう思い込んでいました。でもKさんには、「教会に行きたい」という願い、そして「聖歌を歌いたい」という気持ちがあったのではないかと思います。それは丁度、後ろからイエス様の衣の裾に触れた、あの女性の切なる想いと重なって私には感じられました。

ヤイロの娘の蘇生物語には、出血の止まらない女性の奇跡的な治癒物語が挟み込まれています。ヤイロもこの女性も、躊躇することはあってもただイエス様に信頼を置き、み前にひれ伏した者たちです。イエス様は、この女性におっしゃいました。「娘よ、あなたの信仰があなたを救った。安心して行きなさい。病苦から解放されて、達者でいなさい」(聖書協会共同訳)

Kさんに導かれての、切なく、暖かな月夜の道行きの出来事です。

・・・主の平和を創り出す働き・・・

「女性に対する暴力を根絶するために祈る」礼拝*に参加して

執事 ヒルダ 藤田美土里 (東京教区)



礼拝収録を終えて

2016年12月1日、第1回目の「女性に対する暴力の根絶を求めて祈る」から6回目となった2022年、長年の間に空気のように当たり前とされてきた女性差別、意識が変わりつつありながらも「暴力」は今も続いている。6年前、東京教区の礼拝として「女性

への暴力」が語られ、祈られた時、涙がポロポロと流れたことを今でもはっきりと覚えている。常識や価値観を見直し言語化すること、何が暴力であることを認識することから根絶への取り組みは始まるのだろう。

今回、後藤香織司祭の説教で語られたのは、性の多様性の認識や価値観の違いに起因する話であったが、こんな差別や暴力もあるのかと驚かされる出来事だった。ヨハネ福音書12章「ベタニアのマリアの油注ぎ」の箇所から、マリアの奇異な行動とトランスジェンダーの方々への差別や暴力が重ねられ、自分の価値観や認識はどこからきているのか、み言葉から問い直す事の大切さが語られた。人間は自分たちが理解できない出来事に対し、恐れや不安を抱く。イエスだけがマリアの行動が預言者的「イエスの埋葬」の行為だと理解し、お褒めになった。しかし、弟子たちは何を排除したのか、「理解できない者」であるという自覚はない。

続く臼井一美さんの講演では、最近理解が進んでいるかに見える性の多様性、セクシュアリティ理解について考える機会を頂いた。アメリカの福音派指導者たちによってつくられた「ナッシュビル宣言」は、昨年2022年夏に日本語に訳され、聖書に反する価値観や信念が広がっているとして「NBUS (Network for Biblical Understanding of Sexuality、性の聖書的理解ネットワーク)」はウェブサイト上で賛同者を募っている。「NBUS」は男女二元論に立ち、性の多様性を否定しているが、それによって結果的に誰を排除しているのか、何が問題なのかを伺った。講師の臼井さんもまた旧来の価値観にとらわれず、恐れず聖書を通して常識とされて来た価値観を問い直し、み心を求める続けることの大切さを問われた。私自身、性の多様性について考えてこなかった訳ではないが、当事者の言葉に耳を傾ける事の大切さを感じた。こういった議論は、対立関係のまま平行線を辿ることが多いという印象を持っているが、自分を絶対化しがちな人間の姿がよく表れているように思う。

自分のセクシュアリティを否定されることは存在の否定を意味する。悩んだ末自殺に追い込まれる人々がいると伺った。対立する価値観の前では、どちらが正しいかの議論は当事者を置き去りにする。傷んでいる人々の声に耳を傾けることの大切さをイエスの歩みから学びたいと思う。そして、これらの課題の背景には、結婚観・家族観など国家体制の維持装置として働く婚姻制度、戸籍制度があることを知りつつ、聖書を通して神のみ心を求め、価値観を問い直し続けることが大切だと思う。「女性」に代表される社会的弱者に対する暴力の根絶を求めることは、「主の平和」の働きに連なる教会の働きである。

(*2022年11月27日から配信、東京教区聖アンデレ主教座聖堂ホームページ <http://www.anglicanecathedral.tokyo> よりご覧いただけます)

ジェンダーの視点で見るタンザニア

アンナ 金子登美江 (管区事務所総務主事、北関東教区)

USPG 主催の協議会、「私の民を解放しなさい：人身売買に対する教会の呼びかけ Set My People Free: The Call of the Church against Human Trafficking」がタンザニアのダルエスサラームで開催され、前後泊を含む1月27日(金)～2月4日(土)までの8日間、タンザニアに滞在いたしました。協議会には15名の首座主教を含む29名のアングリカンコミュニ



Christ Church Cathedral, Zanzibar の前で

オンに連なる代表者が集い、学びや交流などを通し実り多き一時を過ごしました。代表団としての女性の参加者は4名と少ないものでしたが、登壇者の約半数とUSPGのスタッフの多くは女性でしたのでジェンダーバランスはさほど悪くはなかったように思います。日本聖公会、USPG、タンザニア聖公会、参加者の皆さまなど、お支えくださった多くの方々に心より感謝申し上げます。



市内の様子



聖アンデレ教会



フィッシュマーケットにて

会場となった東アフリカに位置するタンザニアの都市、ダルエスサラームの気温は 30℃前後、日差しは日本の夏よりも若干強く、汗ばむ陽気です。会場となったホテルの目前には穏やかなインド洋が広がり、吹き抜けるあたたかな風が、寒く暗い日本から来た私を優しく迎え入れてくれました。ダルエスサラームの中心街は近代的



協議会会場

ですが、少し外れると長閑な街並みとなり、そこかしこの大きな木々の木陰で人々がのんびりと休んでいます。道路の真ん中では、果物、小さな電化製品、おもちゃなどを、年齢も性別も多様な人々が売っていて信号で止まる度に声を掛けてきました。イスラム教徒が多い国なので、街行く女性たちは肌を露出せず、色鮮やかなワンピースや大判のスカーフを上手に活用し肌を覆っていたのが印象的でした。

1月29日(日)は5つのグループに分かれ近隣教会の主日礼拝に参列いたしました。私たちが訪問した聖アンデレ教会の敷地は広く、木陰を上手に活用した屋外休憩所などもありとても居心地の良い雰囲気です。礼拝堂に隣接する別棟からは美味しそうなお食事の匂いがし、女性たちの賑やかな会話が聞こえてきます。白い大きな礼拝堂に入ると祭壇に向かって男性が右側、女性が左側に分けられており私は左側と指示されましたが、通訳が必要ということを経由して男性側に座らせていただきました。こういう時は堂々と振る舞うことが大事です。自己紹介、陪餐など小さな難所はいくつかありましたが、何事も「アサンテサーナ(ありがとう)」と笑顔で乗り切り事なきを得ました。聖歌隊の熱唱とドラムバンドによる熱演、もくもくと燻らすお香、礼拝堂内に響き渡るスワヒリ語、参加者と司式団が一体となり五感を用いて賛美する姿が素晴らしかったです。



聖アンデレ教会での主日礼拝とご準備くださったお食事

ところで。タンザニアのサミア・スルフ・ハッサン大統領は女性です。礼拝堂では男女別に座る、女性は肌を露出しない、食事は女性の仕事、など保守的な側面によって感じたタンザニアのジェンダー像から、女性が大統領でいらっしゃることに大変驚きました。世界経済フォーラムによる2022年のジェンダーギャップ指数によると、タンザニアは64位、日本は116位。実は日本は大きく立ち遅れ、タンザニアよりもずっと後位です。今回の協議会では人身売買や現代版奴隷制度を学びましたが、タンザニアでは過去の奴隷貿易の歴

史を経て、国を挙げて法整備を行ないながら政官民が一体となり積極的に現代の人身売買や奴隷制度の撲滅に取り組んでいる様子を学びました。人権問題に積極的に取り組む姿勢がジェンダーギャップの解消にも反映されているのかもしれませんが。

人身売買と聞くと遠い場所での出来事に思われるかもしれませんが、安価で良い品物を買うということは誰かが安価な賃金で労働したことによる利益を得た、すなわち、人身売買や現代版奴隷制度から利益を得たことにほかなりません。現代の人身売買や奴隷制度は多種多様で、見えにくくされているのです。こういった事実を知り、私たちは個人で、組織で、どのように取り組むのか、大きな課題が目の前に立ちただかり呆然としました。様々な現代版奴隷を想像していましたが、私たちが日常口にする食べ物や衣服にまで及んでいるとなるとどうしたら良いのでしょうか。社会は何故このような構造になっているのでしょうか。

19世紀の奴隷貿易から現在での人身売買撲滅への取り組みへと努力を続け、ジェンダーギャップ指数は日本よりずっと上位であるタンザニアの姿勢から、一つ一つ丹念に課題に取り組み、社会を変えるのだという熱い想いに触れました。また、多くの講演者から、聴くこと、行動に移すこと、事象を知ること、分かち合うこと、根気強く求めることを学びました。また、交わりから、私は、私たちは、一人ではないこと、全世界に仲間がいることも実感しました。気が付けば、思いがけず様々な気づきを与えられていました。「私の民を解放しなさい」がテーマでしたが、解放されたのは私だったのかもしれませんが。



タンザニアの
Maimbo Mndolwa
首座主教さまと

■ ■ ■ ■ ■ コラム わたしの瞳に映る景色 ■ ■ ■ ■ ■ 今回はお休みです！ ■ ■ ■ ■ ■



女性デスクより



■春が近づき、まもなく3月8日の「国際女性デー」を迎えます。毎年この日の前後には、ニューヨーク国連本部で「国連女性の地位委員会(CSW)」が開催されます(今年は3/6~17)。これは各国政府代表者が世界中の性差別に関する課題を協議する場であると同時に、世界中のNGOからの参加者が集まる場でもあります。日本聖公会からも多年にわたって聖公会代表団メンバーの派遣を続けていたCSWは、コロナ禍によりヴァーチャル開催が続いていましたが、今年は国連本部とオンラインのハイブリッドで行われます。優先テーマは「ジェンダー平等とすべての女性・少女のエンパワーメント達成のためのデジタル時代における革新、技術変革及び教育」です。高度なデジタル技術の時代を感じさせられますが、子どもたちが戦禍に見舞われて教育へのアクセスを奪われないように、強く願います。

■今号ではジェンダープロジェクトの金子登美江さんがタンザニアでの経験を紹介しておられますが、アフリカつながり？といえますか、沖縄教区上原榮正主教と、女性デスク吉谷かおるは2月12日～19日、ガーナの首都アクラで開催されたACC-18(第18回全聖公会中央協議会)に出席しました。ここでは詳しくお伝えできませんが、世界中から管区の代表者が集まり、様々な報告や決議が行われました。2006年、管区に「女性に関する課題の担当者(女性デスク)」が設置されたのは、2005年のACC-13の決議を受けてのことでした。それから時は流れ、3年後、次のACC-19に向けては「ジェンダー正義」の進展について報告するように要請されています。折しもNCC(日本キリスト教協議会)では、超教派のワーキング・グループを組み(吉谷が参加)、「ジェンダー正義に関する基本方針(仮称)」の策定を急いでいるところです。「女性の地位向上」が必要なくなったわけではないですが、今後ますます「ジェンダー正義」という言葉が定着して、ジェンダーによる差別をなくすための取り組みが進められていくように思います。

■ジェンダープロジェクトのメンバーとして、15年間女性デスクと協働してくださっていた金善姫司祭(愛称そんちゃん)が、巻頭に書かれているように、4月から大韓聖公会ソウル教区へ出向し、日本をしばらく離れることになりました。たいへんなことも多かったかと思いますが、金司祭の問題意識や感性にわたしたちも多くのことを学び、ITや編集スキルにも大いに助けられました。韓国の女性たちとの交流が進んだのも、金司祭の抜群の通訳力・翻訳力のおかげです。さびしくなりますが、これからは『タリタ・クム』に韓国からの情報発信をお願いします。

女性とは？

ジェンダープロジェクトでは、「女性」とはあらゆる社会構造の中で、立場が弱くされている人たちの一つのグループであるというとらえ方をしています。性の多様化の中、「女性」という表現自体が問題視されることもありますが、タリタ・クムで用いる「女性」という表現は、「女性」の視点を大切にしながらも、男女二分法にとどまった性別用語としてのみ理解されるより、包括的な意味で理解される事を意図しています。

正義と平和委員会

ジェンダープロジェクトとは？

教会におけるジェンダー課題の共有と克服のために、すべての人が尊重されるネットワーク作りをめざして活動しています。機関紙としてのニュースレター「タリタ・クム」の発行(年3～4回)、学習会の開催、出前ワークショップの実施なども行っています。一人でも多くの方が、ジェンダーの課題に関心を持ってくださり、共に考えていける場をつくっていきたく願っています。

タリタ・クムとは？ 「少女よ、起きなさい」という意味のアラム語です。会堂長ヤイロの願いにこたえて出かけて行き、死にかかっている幼い娘の手をとって、イエスさまが言われた言葉です(マルコ5:41)。今までジェンダーのために十分に発揮することのできなかつた女性たちのさまざまな潜在的な能力や感性や行動力が、神さまの祝福によって主の栄光をあらわすために、より生き生きと用いられますようにという祈りと願いをこめて名付けました。